教育実践研究　第27集（2017）187―192

［特別活動］

仲間同士のつながりを深めるための話合い活動の工夫とマネジメントの有効性

－大縄記録会に向けた計画的・組織的な話合いによる価値観の更新を目指して－

黒田　隆夫*

1　はじめに

平成19年の教育再生会議で提言された道徳の教科化は，様々な議論や工夫を重ね，平成30年度より実施されようとしている。改訂の経緯の中で，文部科学省は，「社会を構成する主体である一人一人が，高い倫理観をもち，人としての生き方や社会の在り方について，時に対立がある場合を含めて，多様な価値観の存在を認識しつつ，自ら感じ，考え，他者と対話し協働しながら，よりよい方向を目指すことが重要である」と示した。これは道徳の時間に限らず，学校生活の様々な場面で育むべき資質・能力である。特別活動の小学校学習指導要領「新旧対照表」でも，特別活動の取扱いで教科道徳との関連を考慮しながら適切な指導を行うよう明記されるなど，特別活動と道徳との結びつきをこれまで以上に重視した取組が必要となってきている。

国連児童基金（ユニセフ）の調査によると，「過去数か月に学校で１回以上いじめられた」と答えた日本の子どもの割合は27.4％と先進国の中でも高い値を示している。これは，クラスの４人に１人がいじめを受けたことになる結果であり，学校での集団活動の中で人間関係を上手く築くことができない子どもが多いことの現れでもある。学校生活での子ども同士の意見の対立は日常的に起こる。これをできるだけ無くし，問題のないクラスをつくるのではなく，意見を重ね，互いの思いを理解し，より強固に結び付く人間関係を作っていくことが必要と考える。

川村（2011）によれば，クラス会議を中心とした子ども同士のコミュニケーションの場の設定と工夫が，協力的態度の育成と学級の自治的雰囲気の向上に役立つとしている。また，北野（2015）は，クラス会議によってクラスの一員としての自分の存在を確認することができ，対人関係の向上に効果的な結果が得られることを記している。子ども同士の対話によって，関係性を深めることは明らかであるが，課題として議論の質の向上と，かかわり合う場の継続的な設定が必要であるとしている。

子どもが他者とのつながりを深めていくには，話し合う場の設定や内容をより工夫し，内省的思考を高め，自己の在り方を捉え続けていく取組が効果的ではないかと考えた。

そこで，本研究では，子ども一人一人が確かな思いや願いをもち，必要感のある行動につなげ，より深く信頼関係を結ぶことができるような話合いやクラス会議の在り方について実践を行うことにした。

2　児童の実態から

当校は，上越市高田の中心に位置し，全校児童300人程の中規模校である。文部科学省の研究指定を受け，「ふれあい」という領域による共生的な態度を基盤とした資質・能力を育む取組を全校で行っている。日々の生活の中で起こる問題場面を重視し，時に悩み，葛藤しつつ，考えを深め，自らの生き方を選んでいく姿を，子ども同士の話合いの中で醸成していく活動である。

学級担任をしている４年生の児童は，男子８名，女子11名，計19名である。活動に前向きな子どもが多く，どの活動にも探究的思考を発揮し，課題に対して没頭し，主体的に解決しようと取り組む姿が見られる。クラス会議は４月から行い，係活動や給食時の役割についてなど，日々の学校生活の中で起こる問題を話し合い，時に本音をぶつけ合いながらより良い集団を作ることを目指してきた。一方，自分の気持ちを言葉に置き換え，主張する子どもは多いものの，相手の気持ちを考え，折り合いをつけながら，まとまりのあるクラスを作ろうとする姿には課題が残る。単発的な話合いによって，互いの主張が噛み合わず，次の行動に生かせない話合いになることもしばしば見られた。これまでのクラス会議は子ども発信の問題提起で，「問題が起こったからみんなで解決する」スタイルが多かった。より深い信頼関係を構築するには，教師の意図的な仕掛けによって，話合いに必然性と継続性をもたせ，考えを更新し続ける工夫を行っていくことが効果的であると考える。

＊ 上越市立大手町小学校

3　研究の目的

本研究では，中学年による話合い活動を通して，子ども達が継続的に考えを作り上げ，自主的な行動を促し，互いの価値観を認め合ったり，望ましい人間関係を形成したりしていく活動の在り方を探る。ただ話合いを続けただけでは，より考えを深め，価値観を更新することは期待できない。文部科学省は言語活動の充実において，思考力・判断力・表現力等を育むためのクリティカル・シンキングの育成・習得として以下の６つの活動例を挙げている。これらをクラス会議などの話合い活動に生かし，より確かな言葉で話合いが進められるようにしたい。

(1)　体験から感じ取ったことを表現する
(2)　事実を正確に理解し伝達する
(3)　概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする
(4)　情報を分析・評価し，論述する
(5)　課題について，構想を立て実践し，評価・改善する
(6)　互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させる

また，平成26年の文部科学省の資質・能力に関する論点整理では，教育課程において編成・実施・評価のカリキュラム・マネジメントを適切に行うことによって，より資質・能力を育成する教育の充実を図ることができるとされている。話合いを計画的，組織的に運営するとともに，子どもの実態に合わせ，より協働的な学びとなるよう環境を整備していきたい。

これらの視点を基にクラス会議を中心とした話合い活動を実践することで，子どもがどのような価値を獲得し，仲間とのつながりを深めていくことができるのかを明らかにしていく。

4　研究の方法

本研究では，担任する４年生を対象に，次の３つの手立ての有効性について，行動観察，シートの記述，アンケート調査等から考察を行っていく。

(1)　全校イベント「大縄記録会」の設定と，それに向けたカリキュラム・マネジメントによる継続的な話合い活動の実施

子ども同士が話し合い，価値観を更新していくための材として，委員会的組織であるイベントリーダーに協力を依頼し，大縄跳びによる全校イベントを設定した。当校では，これまで定期的なイベントとして設定されていなかったが，全校での記録会を設定し，クラスごとに取り組むことにした。大縄跳びは，「全員で記録向上に向けて取り組めること」「比較的安全で，子どもだけの自主練習が可能なこと」「役割や跳び方など，工夫する要素が豊富にあること」などの良さがある。記録会に向けた練習と話合い活動を通して，一人一人がそこに起こる課題に自分事として向き合い，内面にある価値観を更新できるようにしていきたい。そこで，記録会までの大縄跳びに関する話合いや練習をシステム化し，Ｐ(Plan)・Ｄ(Do)・Ｃ(Check)・Ａ(Action) のサイクルによって行うことにする。話合いは，クラス会議だけでなく，子ども達が練習後に自主的に言葉を交わす時間（座談会）も設定した。

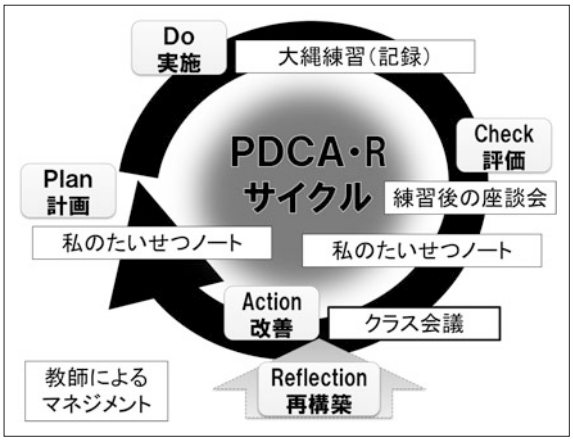

図１　PDCA･Rサイクルによる思考の積み重ね

振り返りの記述や話合いによって，自己評価と他者評価の双方の視点から活動を振り返り，向上を目指すことができるようにした。また，クラス会議に向け，子どもの内省的な思考に基づき，より一人一人が議題に対し，必然性をもって話し合うことができるように，クラス会議の計画・運営についてマネジメントを行う。話合いやその前後の思考・行動を意味付け，捉え方，関係性をあらためて考え直し，活動を再構築Ｒ（Reflection）していけるようにする。活動計画では，行動観察やシートの記述をもとに，より実態に即した内容になるよう，話し合う議題をあらかじめ予想し，臨機応変に対応していきたい。

図２　計画的な活動のサイクル

⑵　「私の『たいせつ』ノート」による内省的思考の明確化と価値の更新

子ども達は，これまで「学びのシール」と呼ばれる記述式の振り返りツールを活用し，毎日の振り返りを行ってきている。１年生の入学当初から継続している取組で，日々の行動を客観的にとらえ，思考を促すことが目的である。本活動では，大縄跳びの練習後にシールを記述し，「私のたいせつノート」に貼ることで，思いを書き溜めていく活動を設定する。自分が取り組んだことに対して「満足」か「不満」かを，シールの色分けや貼る位置で示すだけでなく，その時の自分の態度や取組に対する自分の受け止め方といった内省的思考にかかわる要素についても明確化し，どのように価値観が変わっていったのかが視覚的にも捉えられるようにする。ある程度書き溜めた時には，グラフや表のように捉えることができ，自分を見つめ返す材料として大きな効果が期待できる。毎週金曜日に振り返りの時間を定期的に設けることで，一週間を通して価値観がどのように更新してったのかを追う。

⑶　論点を見出し，葛藤場面を意図的に作り出す話合いの設定

話合いの質を高めるためには，まず大縄跳びという活動に対して「もっとやりたい」「もっとこうしたい」という思いが高まっていくことが大切である。ただイベントに向かって練習を繰り返す，話し合うだけでは，価値観の変容は期待できない。

そこで，今，大切にしたいのは何なのか，子ども達に価値の選択を迫ることで，話し合う論点を明確にし，葛藤を促す場面を意図的に設定する。話合いの実態に合わせ，「楽しい練習にしたいのか，勝つための練習にしたいのか」「役割（跳ぶ順番や回す人）を替えるか，替えないか」「練習日を増やすか増やさないか」といった視点を与えることで，子ども達は自分が何のために頑張ろうとしているのか，どのような姿がクラスの理想の姿なのかという価値観に基づいて真剣に考える。自分や仲間の姿を思い返し，真に大切にしたい価値を選択し，その思いを伝えることで，どちらもクラスにとって大切な価値であることに気付いていく。そうすることで，相手の価値観を受け入れつつも，自分の行動に自信をもって取り組むことができ，「自分は仲間のためにこうしたい」とつながりと目的意識をもって取り組んでいくと考える。

5　取組の様子

⑴　ＰＤＣＡ・Ｒサイクルによる思考の積み重ねとカリキュラム・マネジメントによる活動の再構築

異年齢活動のリーダー組織である遊びリーダーから大縄記録会が行われることを知り，子ども達は「クラスのために頑張りたい」と気持ちを高めていた。一人一人が跳ぶのではなく，複数人が同時に跳ぶと人数分だけ回数が加算されるルールにも驚き，「友達と一緒に跳んでみたい」と協力して跳びたいという思いを早くから高めていた。

健康（教科としては体育）の時間での記録会に向けてのスケジュールや，全５回のクラス会議の予定をすべて伝えたことで，子ども達は本番に向けて，計画的に進めていこうという気持ちが生まれていた。１回目のクラス会議を前に，子ども達がどのような計画（Ｐ）を考え，評価（Ｃ）し，取り組んでいくのかをあらかじめ物語のように作り上げ，予想した。

表１　大縄大会のルール

- クラスごとに記録を測る。
- 一度に何人跳んでもよい。２人同時に跳んだ場合は２回として数える。
- 跳び方は「８の字跳び」を原則とする。
- 制限時間３分間で，何回跳んだかを競う。
- 遊びリーダーが主体となって計画，運営を行う。
- 学年ごとにハンディを付ける。(学年×20回)

表２　予想される子どもの葛藤場面と議題の設定

	予想される子どもの葛藤	予想される議題	内容
第１回	学年目標「全力，協力，みんなで一つのにじになろう」に合うゴールは楽しさか，記録の向上か。	・大事にしたいのは「楽しさ」か「新記録」か	希望や目標をもって生きる態度
第２回	跳ぶことが苦手な人がいる。うまくなってほしいけど，どんな声を掛けたらよいかわからない。	・失敗した人に対してどう声を掛けるべきか	望ましい人間関係
第３回	いつも回す人が同じになってきた。跳ぶのが苦手な人である。全員で跳べるようになりたいがどうしたらよいか。	・役割（跳ぶ順番や回す人）を替えるか，替えないか	当番活動等の役割と働くことの意義
第４回	記録が上がってきたが，最高記録に届かない。どうすればさらに記録を伸ばせるか。	・前回決めためあてを替えるか，替えないか	望ましい人間関係
第５回	本番を控え，どんな気持ちで臨めばよいのか。	・本番に向けて大切にしたいことを考えよう	希望や目標をもって生きる態度

第１回の練習では，複数人が同時に跳んでよいというルールに慣れず，127点という結果に終わった。「連続跳びがこわい」「顔面に直撃すると痛い」と楽しいながらも不安要素を多く感じていた。記述には「もっと多く跳べるようになりたい」「友達と一緒に跳んで成功したい」といった内容が多く見られ，予想通り「記録」と「楽しさ」の２つを求める話合いが望ましいと感じた。クラス会議では，予想通り，「楽しさ」と「記録」，双方の価値を求める意見が多く出さ

図３　マネジメント①思いの可視化

れた。「楽しいも大事だけど，記録が増えればその分楽しく感じるはず」「記録ももちろん上げたいけど，みんなが楽しい気持ちを無くさないことは一番大事」など，互いの良さを認めつつも，自分が大切にしたい思いを真剣に伝える姿が見られた。会議の後，シートに振り返りの言葉を書いていたが，一人一人の考えをできるだけ共有し，仲間の思いを感じながら次の活動に向かってほしいと考え，仲間の意見の「可視化」を行うことにした。シールを「うまくなりたい」「楽しみたい」で区別し，１枚の画用紙に分けて貼り，掲示することで，次のクラス会議までに価値観の変容が見られたかどうか分かるように工夫した。

クラス会議を経て，子ども達の行動に変化が見られるようになった。「うまくなりたい」と考えた子どもは失敗した仲間に積極的に声を掛けるようになり，「楽しみたい」と考えた子どもは仲間が跳ぶ度に「はいっ」と声を掛けるようになった。練習後の座談会では，自分の取組を評価する意見と，仲間の失敗や頑張りを評価する意見が多く見られ，主張を織り交ぜながら熱弁する子どもが増えてきた。同時にどちらの価値を優先すべきか悩む子どもも見られるようになってきた。話合いの間，黙って意見を聞くことが多く，振り返りシートで「〇〇さんが回数を増やしたい考えも分かるけど，引っかかった△△さんへの声掛けを見ていると，どうしていいか分からなくなった」と双方の価値の間で揺れ動く気持ちを書いていた。そこで，記録が伸びていく喜びと仲間と楽しむ事，どちらも可視化し，より価値について考える機会を増やしたいと考え，新たに「回数のグラフ化」と「ありがとうメッセージ」の２つの支援を行うことにした。また，その後のクラス会議において，活動の目標設定よりも，より相手の気持ちを尊重し，折り合いをつける話合いを重視したいと考え，論点が望ましい人間関係の育成に向くよう，議題の設定を再構築（R）した。

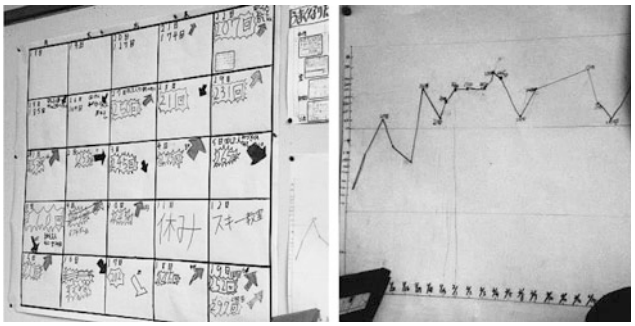
図４　マネジメント②記録，思いの可視化

表３　実際に行ったクラス会議の議題

第２回 「練習を振り返ろう」	これまでの練習を通して感じたことを話し合った。楽しくやりたいものの，記録も意識し始めたことから強い口調で指示を出す仲間の姿が気になり始めている。「勝ちたいか，楽しみたいか」について考えている。	⑵ウ：望ましい人間関係の形成
第３回 「相手の気持ちを考える」	マイナスの発言が圧倒的に多く出された。記録と楽しさの矛盾に悩む。「頑張りたいけれど，今のままでは・・・」と自分の悩みを打ち明け，楽しく記録更新に向かえない自分についての発言が多く出された。	⑵ウ：望ましい人間関係の形成
第４回 「相手の姿に自分は」	相手の嫌なところばかりが目につく時期。「はい」という声掛けをしない仲間への不満など，言いたいけれど我慢していたものがあふれてくる。次第に相手と自分の思いの違いに気付き始めてきた。	⑵ウ：望ましい人間関係の形成
第５回 「自分から楽しくしよう」	「これではいけない」と感じ，方法を変えた。ここでは，「大縄，最高！」と何度も言いながら跳ぶ作戦になった。結果，最高記録を更新することになり，気持ちが一気に盛り上がっていった。	⑵ア：希望や目標をもって生きる態度の育成

議題の設定以外にも，ホワイトボードによる思考ツールを使った座談会や，ビデオカメラの撮影による振り返り，記録のカレンダー化やグラフ化など，より内省的な思考を視覚的に促すことができるよう支援を行った。また，クラス会議で記録された板書はすべてデジタルカメラで撮影し，印刷して教室に掲示した。子ども達は，練習の度に真剣な眼差しで掲示物やビデオを見つめ，跳ぶ時の表情や声を掛ける仲間の姿，記録との関係などについて話し合う姿が見られるようになった。シールの記述には，「友達のことばかり見ていたけど，まず自分を直したい。」「昨日よりも記録はアップしたけど自分は何も変わっていない。もっと声を出したい。」など，より深く考えを更新する子どもが多くみられるようになってきた。

⑵　Ａ男の姿に見られる「私の『たいせつ』ノート」による内省的思考の明確化と価値の更新

Ａ男は，比較的運動が得意な児童である。何でもやりたがる気質で，始めは縄を回す役に立候補し，記録が50回も向上したことから「縄回しが向いている」と考え，以降，率先して縄回しの役を行っていた。しかし，話合いによって全員に跳んでほしいという仲間の思いを受け，「実は，最初は縄から逃げていた。だから，もっと練習してうまくなりたい」と仲間の期待に応えたい気持ちを示し，跳ぶ方の練習に参加するようになった。それまでは青のマイナスシールが

必ず貼られていたが，その日から，赤のプラスシールが多く貼られるようになった。「自分の苦手なところを直してから人のことを言う」と決めたA男は，自分に厳しく，仲間に優しい気持ちで練習に向かうようになり，練習の後は毎日記録されたビデオを友達と食い入るように見て，分析していた。クラス会議で縄回しの担当になったB男の仲間の悩みを聞いたとき，A男は何度も手を挙げ，解決する方法をいくつも考え，発言していた。以下はA男のB男の悩みに対する「私のたいせつノート」の記述である。

> B男の悩みは，前より大変そう。縄回しは一生懸命頑張っているから，自分から変わらなければならない。自分が引っかからないように，注意するとか，自分でB男のことを支えたい。ただ「がんばれ」だけじゃ無理だから，こっちでも工夫してやりたい。（中略）回すのが遅くても265回までいけるのはすごいことだから回す人が悩むことはない。B男の悩みは自分でじっくりと考えてB男を手助けしてあげたい。だけど，よほど自分が完璧じゃなければだめかもしれない。もっと工夫したい。

A男は，普段ふざけるのが大好きで，周囲からやる気のなさを注意されたりすることが多い児童だった。クラス会議によって相手の悩みを理解し，私のたいせつノートの記述によって，過去の自分の経験と重ね合わせて考えたことで，真に心から仲間の思いに寄り添い，支えようとする気持ちが育ったのだと考える。本番では310回という新記録を出すことができ，A男は振り返りで「奇跡だ！みんなが本当の本気になったからできた記録だ」と喜びを表現していた。

シールの記述だけでなく，A男はその日の気持ちをイラストで表したり，改善していきたい内容をシートの裏面にメモしたりするなど，工夫を重ねていた。自分の考えを更新するためだけでなく，仲間とどうすればつながるのかを考え，記録を蓄積する姿に，切実感をもって取り組む気持ちを感じた。

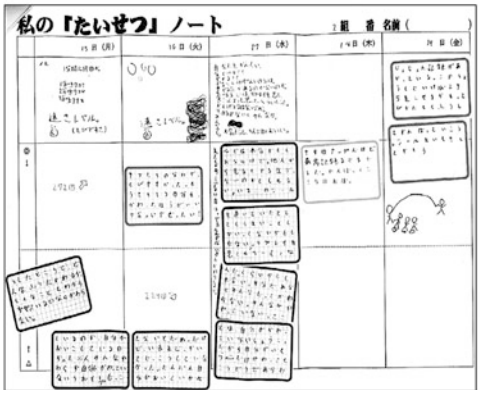

図５　A男のシート

(3) 論点を見出し，葛藤場面を意図的に作り出す話合いの設定

本実践では，クラス会議にクリティカル・シンキングの手法を加え，教師の声掛けによって子どもの発言を深く掘り下げる支援を行った。

表４　クリティカル・シンキングに基づく教師の声掛けと司会への助言

(1)　体験から感じ取ったことを表現する	「練習のどの時に気付いたの？」
(2)　事実を正確に理解し伝達する	「うまく跳べた時のことをもう少し詳しく教えて」
(3)　概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする	「黒板に書いて説明してもいいよ」
(4)　情報を分析・評価し，論述する	「〇〇さんの意見を詳しく言える人はいますか？」
(5)　課題について，構想を立て実践し，評価・改善する	「もし，その考えならどうなるはずなの？」
(6)　互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させる	「Bの考えは〇〇さんにとって絶対にだめなの？」

話合いでは，より体験を通して得た気付きや思いを言葉にしっかりと置き換え，伝えることができるよう，意見を価値付け，解釈し，意図した方向に向くよう支援した。何度か繰り返し声を掛けていると，発言する子どもたちも，何を伝えることが大切なのかを次第に理解し，思いを伝えるようになってきた。全体的に思考の方向性が定まってくると，対立する意見が出たとしても堂々巡りにならず，相手の気持ちを考えて発言する姿が多く見られるようになった。そのため，論点抽出も明確になり，話合いの多くを感想や評価ではなく，主張に折り合いをつけることに費やすことができた。

第２回のクラス会議では，掛け声について話し合うことになった。ここでは，意図的に言えない子どもの気持ちに焦点を当て，掘り下げて聞くことにした。「言えない人はやる気がないわけではない」「言いたくても跳ぶので精一杯」「言えるようになりたいけどなかなか変われない」など，葛藤している気持ちが多く引き出された。全員で声を出すことの難しさと，「みんなで一つになる」という学級目標に近付きたい思いの中で子どもたちは揺れていた。そこで，意見をイラストや色磁石で図式化し，「『はい』と言えない人はやる気がないのか」という論点を打ち出した。子ども達は頑張りたい気持ちを表に出せない仲間の気持ちに気付き，自分にできることはなにか，行動を選択していた。会議の後の振り返りでは，「声は出ないけど笑顔で頑張る」「出ない人の分まで自分が声を出す」といった記述が見られた。その後の練習では，肩を組んだり，笑顔でハイタッチしたりする姿が見られ，自分から相手にかかわろうと主

図６　第２回クラス会議の板書

体的に行動する子どもの姿が見られるようになった。

6　成果と今後の課題

記録会本番では，過去最高の310点を記録し，初めて300を超えるという結果となった。子ども達は，笑顔で抱き合い，互いの健闘を称え合っていた。紆余曲折しながらも，最高の記録にたどり着くことができたことは，クラス会議によってより確かな信頼関係を築くことができたからである。

活動を進めるごとに，子ども達の大縄に対する意欲の向上がシールの記述から読み取ることができた。「大縄は苦手」と書いていた子どもも，積極的に声を掛け，自分にできることを探して取り組む姿が見られるようになった。

資料１は，記録会後に行ったアンケートを表に示したものである。10項目すべて，取組前と比べて自分が「成長した」と感じたと評価していた。また，「大縄で一番大事にしたこと」について自由記述を行った結果，「仲間のことを考えて行動した」「少しでも協力できるようにした」など，他者への協力について答えた子どもが74％，「回数が増えるように」「たくさん発言できるように」など，自分の頑張りについて答えた子どもが26％という割合であった。これらの内容から，本研究の目的である「自主的な行動を促し，望ましい人間関係を形成する話合い」は機能していたと評価できる。「最初の頃は」「練習を重ねるたびに」「できるようになった」といった記述からも，継続的なクラス会議の実施と，カリキュラム・マネジメントによる活動および支援の再構築は，子どもの思いや願いを連続させ，仲間の為に自分にできることを考え，価値観を更新し続けることに有効であったと言える。

資料１　児童アンケート「大縄を振り返って」

	◎	○	－	△	×
①　話合いに積極的に参加した	13	6	0	0	0
②　問題に対して，自分にできることを考えた	15	4	0	0	0
③　問題に対して，自分にできることを行った	13	6	0	0	0
④　友達に思いや考えを伝えることができた	14	5	0	0	0
⑤　友達のなやみを受け止めることができた	13	6	0	0	0
⑥　大縄で「楽しむ」ためにがんばった	18	1	0	0	0
⑦　大縄で「記録をのばす」ためにがんばった	17	1	1	0	0
⑧　活動を通して，大縄が好きになった	18	1	0	0	0
⑨　活動を通して，みんなが仲良くなったと思う	18	1	0	0	0
⑩　活動を通して，自分が変わったと思う	13	5	1	0	0

また，クリティカル・シンキングに基づく教師の助言や声掛けにより，論点を定めながら話合いを進めていくことで，より子ども一人一人が考えを作り上げ，行動し，より良い関係作りを行うことができるようになった。「計画的・組織的な話合いの設定」「思考の可視化」「意図的な論点の抽出」の３つの視点でクラス会議をマネジメントしていくことは，内省的思考を促し，仲間との信頼関係を結ぶうえで効果的であったといえる。

本研究では，一単元の取組として行ってきたが，子どもがより深い信頼関係を築いていくには，年間を通した一貫性のある取組であることが有効であると考えられる。必然性のある話合いは，教師の仕掛けによる活動だけでなく，日常の生活の中にこそ，多く存在すると考える。今後は，教師による支援，マネジメントだけでなく，子どもの「自治的運営」によって会議が成立し，集団としての力を高めていけるようなクラスを目指していきたい。

引用・参考文献

１）国連児童基金（ユニセフ）　『ユニセフ・イノチェンティ研究所Report Card11研究報告書』web文書（https://www.unicef.or.jp/library/pdf/labo_rc11ja.pdf）2011年

２）文部科学省　『言語活動の充実に関する指導事例集』　教育出版株式会社　2011年

３）文部科学省　『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会－論点整理－』web 文書（http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf）2015年

４）川村孝樹　『協力的・自治的学級集団の育成』　教育実践研究　第21集　上越教育大学学校教育実践研究センター　2011年

５）北野　稔　『対人関係の向上を目指した取組としてのクラス会議の可能性』　教育実践研究　第25集　上越教育大学学校教育実践研究センター　2015年

６）橋本定男　『子どもが力をつける話合いの助言』　明治図書　1997年

７）赤坂真二　『学級を最高のチームにする極意』　明治図書　2013年

８）赤坂真二　『赤坂版「クラス会議」完全マニュアル』　ほんの森出版　2014年

９）大手町小学校　『大手町カリキュラム2013　真の自立と共生を目指す教育課程の創造』上越市立大手町小学校　2013年